

見ざる言わざる聞かざる

加藤 誓 (ちかい)

私は、昭和の甲申（きのえさる）、さる年の生まれである。

「猿も木から落ちる」「猿蟹合戦」「猿芝居」「猿知恵」「猿真似」「犬猿の仲」など、どちらかといえば余り「面白くない諺（ことわざ）や、たとえ」として扱われ、「さる、さる・・・。」とからかわれた経験は、同じ干支の人には少なからずあると思う。

援護すれば、「猿の語源」は獣の中では、一番知恵が勝る（まさる）ことから付けられたという説が有力であり、勿論12支の中でも言えることで、その「妬（ねた）み」からかもしれない。

猿といえば、日光東照宮の猿の浮彫像が有名である。赤ん坊期から妊娠期までの8面のストーリーで成り立っている。一番有名なのが、幼児期の「見ざる言わざる聞かざる」の三猿のレリーフ像である。



そのいわれは、「物心のつく幼少期には、悪いことを見たり、言ったり、聞いたりしないで、良いものだけを受け入れ、素直な心のまま成長せよという教え」なのだそうだ。この幼児期の教えに異議を唱える人は多くいるが、それは別として、今の私の年齢の立場で考えてみた。

「見る」とは、「現在を隅々までよく観察」し、「残り短い？将来を見る」「見えないものを見る」つまり推察することである。自分のためではなく孫のために、見たくないものでも、三猿像の様に目を押さえてはだめだ。視力はなくとも、しっかり見るのだ。交通事故にもならないようにね！

「聞く」は、「過去の多くの出来事を聞く」又「多くの大切な他人様の考えをよく聞く」「知識や教えの話をもっともっと聞く」等、高齢者は若者より得意な分野だ。ただし「将来のことを聞く」ことは選挙公約のカラ手形や、詐欺や空耳もあり気を付けなければならない。単に「聞かない方が良かった」場合もある。「雑音は聞こえる」で「音楽や自然の良い音の場合は聴く」である。

つまり、耳は、押さえたり、そば立てたりその都度の調整が必要となる。難聴でもいいが、勝手難聴者と称したり、聞く耳を持たない頑固爺にだけはならないように。良い聞き手になろう。

「言う」は自己主張である。「見る」と「聞く」は自分への影響だけで調整が効くが、「言う」は喋ったお相手の、大事な他人様に、影響を与える。従って、特に高齢者には、難しいのがこれである。過去の自慢話は御法度！「喋っていいか、悪いか、一呼吸置くことも大事」。「言わない」のもひとつの自己主張の表現であるが、もう一つ「目は口程に物を言う」これも考慮する必要がある。ところで15年前の甲申（還暦）の年、木目込みの「三猿像」の贈り物を頂き、玄関に飾っている。

「見ざる」「聞かざる」は通常形であるが、

「言わざる」の手が口には行ってない。

「俗説の四ざる」の「せざる」の手の位置でもない。腕を組んで、少し目が上を向いて何か考えているように見える。



送り主は、私の性格をよく知っているようだ。

「あなたのお喋りを止める事は出来ない。よ〜く考えて喋れよ！」と。